

平成26年度

# 「高志の国文学」情景作品 コンクール★入選作品集



【主催】

富山県・富山県教育委員会  
富山県中学校文化連盟  
富山県高等学校文化連盟

平成27年1月発行  
平成26年度「高志の国文学」情景作品コンクール入選作品集  
編集・発行／富山県教育委員会生涯学習・文化財室  
〒930-8501 富山市新総曲輪1-7  
TEL：076-444-3434 FAX：076-444-4434  
ホームページ [http://www.pref.toyama.jp/cms\\_sec/3009/index.html](http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/3009/index.html)

# 発刊に寄せて

富山県知事 石井 隆一

近年、少子高齢化や人口減少、グローバル化が進展するなか、「元氣な富山県」を創るためには、富山県を築いてきた、先人の志やチャレンジ精神に学び、ふるさと富山県に心の根っこを置きながら、本県はもとより全国や世界の舞台で大いに活躍できる人材を育成すること、すなわち「人づくり」が重要です。

このため、県では、高志の国文学館の設置や小中学校生向けの「ふるさととやま人物ものがたり」の作成や活用、高校生の郷土史・日本史学習の本格実施など、ふるさと教育の推進に積極的に取り組んでいるところと。

このコンクールもその一環として、富山ゆかりの作品にふれ、本県出身の偉大な先輩たちの足跡を学ぶことにより、ふるさとの歴史、文化、伝統への理解を深め、誇りや愛着を育むとともに、高い志や希望を胸に、夢に向かってチャレンジする子どもを育成するため実施し、今年度で五回目となります。

年々応募数も増え、どの作品もふるさと富山の魅力、先人の知恵や生き方への素直な感動や郷土への誇りと愛着、そして未来への希望が瑞々しい感性で表現された素晴らしいものばかりであり、大変頼もしく感じています。

皆さんの未来には、無限の可能性が広がっています。今後、いろいろな難しい問題にぶつかることがあると思いますが、決してあきらめず、勇気を持って果敢にチャレンジしていただきたいと思えます。そして、皆さんが生まれ育ったふるさとへの誇りや愛着、家族や地域の方々との絆を大切にしながら、富山県の未来を切り拓く人材へと、大きくたくましく成長されることを心から期待しています。

富山県教育委員会 教育長 寺井 幹男

富山県には、万葉集をはじめ、時代を超えて数多くの文学作品があります。富山にゆかりのある「ふるさと文学」にふれ、感じた情景や心情を文芸、美術、写真で表現することで、ふるさとの魅力を知り、愛着や誇りをもつきっかけとなるように、平成二十六年「高志の国文学」情景作品コンクールを実施しました。今年度は県内中学生・高校生から一六五八点の応募がありました。

これからの富山県を担う若い皆さんが、郷土に根ざした「ふるさと文学」を学ぶことは、ふるさとへの誇りを一層高める契機となることはもちろん、変化する時代を生きるための心のよりどころとなるものです。そのため、県教育委員会では、教育振興基本計画で「ふるさとを学び楽しむ環境づくり」を基本施策の一つに掲げ、高志の国文学館を拠点としたふるさと文学の振興等、積極的に取り組んでいるところです。

この作品集には、中高校生がふるさと文学への感動をもとに、新たな創作に取り組んだ作品がまとめられています。この冊子をきっかけとして、富山県人としての誇りや郷土への愛着がますます深まり、新たなふるさとへの良さや魅力の発見につながることを期待します。

今後ともふるさと富山の文学に親しみ、読書活動を深め、自分とふるさと、そしてこれからの人生について考えるきっかけとしていただくとを心から願っています。

## 入選作品集の利用にあたって

- 入選作品の原作紹介のために、初出の作品に読書案内のコラムがあります。
- 文芸部門については、冊子の構成上、ジャンルごとまとめて掲載しました。
- 美術部門・写真部門は入選順に掲載しました。
- 入選作品集は、「富山県 生涯学習・文化財室」のホームページからダウンロードすることができます。

## 文芸部門

### 知事賞

『越中万葉百科』を読んで

### 家持の「心意気」を胸に

富山高等学校一年 松田 梨子

私が越中万葉に興味をもったのは、中学二年生の時でした。高志の国文学館の展示室で、私は一枚の絵と出会いました。それは全体が紅色の光に包まれた、とても美しい絵でした。それから、その絵が、奈良時代に越中国守として富山に赴任してきた大伴家持が詠んだ歌を題材に描かれていると知ったとき、越中万葉と、大伴家持という歌人についてもっと知りたいと思うようになりました。

春の苑紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ娘子

中学二年生だった私の目を釘付けにした美しい絵のようになった歌です。この歌を声に出して読むたび、桃の花の咲き乱れる春の夕暮れがいつも心に浮かびます。都生まれで都育ちの大伴家持と、富山生まれで富山育ちの私が、感動を共有できる不思議な瞬間です。

大伴家持は、立山に夏も残る雪の歌を詠んでいます。  
立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし

富山に暮らす私達は、毎日立山を見ています。夏に、立山に雪が残る景色もすっかり見慣れていきます。しかし、この歌に出会ってからは、そのキラキラ光る雪の美しさを誇りに思うようになりました。それは、県外に住む親せきの人が富山に来た時、「富山の水はおいしいね」「富山の魚は本当に新鮮だね」と言ってくれる瞬間に少し似ていて、それがあたり前とされていることの魅力を、再認識させてくれる時のようです。私は、ふと思いつきました。それは小学校六年生の夏、学校から立山登山へ行った時のことです。標高の高い所まで登り、私達は雪深の上を歩きました。真夏だというのに、雪は固く、歩くたびに「ガッガッ」という鈍い音を立てました。その一帯は、ひんやりした空気に包まれていて、まるで別世界でした。私は、立山の雪の美しさを私達に気づかせてくれたお礼に、その雪の上を実際に踏みしめた時の感触を、ぜひ家持に伝えたいと思いました。もちろん、いにしえの歌人と、現代を生きている私が会話を交わせる場面などあるはずがありません。しかし、長い歳

月を経た今でも、同じ景色を、同じように心から美しいと感じられるという奇跡は、私にそんな思いを抱かせます。

また、堅香子の花を題材に歌った一首も、とても素敵だと思います。

ものふの八十娘子らが汲みまがふ寺井の上の堅香子の花

もしこの歌の存在がなかったとしたら、こんなに多くの人が堅香子の花の可憐な美しさに気づき、それを深く愛したでしょうか。堅香子の花は、小さくて、私はそのようなかすかなものの中に感動を見つけ、表現した家持は、とても偉大だと思いました。

見ず知らずの土地へ国守として赴任した家持が、富山の自然の美しさに惹かれ、富山を愛してくれたことに、私は家持の瑞々しい「心意気」を感じます。ゆかりのない土地に心を開き、感性の窓を全開にすることは、なかなかできることではないと思います。家持のこの心意気こそ、私が将来、もし見ず知らずの土地への進学や就職を決めた時に、まっ先に胸に携えなければならぬものだと思います。

私は万葉集と出会い、家持が「美しい」と詠んでくれた富山の自然を、私達が「いにしえの人」と呼ばれる未来まで、大切に受け継ごうと決心しました。大伴家持は、それを確信したからこそ、私達に二二三首もの宝物を、残してくれたのではないかと思うからです。

万葉集たまにすれ違ふ家持は真つ白なユリの花に似ている 梨子



大伴家持らが越中社中に詠んだ歌など、とやまに関わる歌を一冊にまとめ、それぞれに解説を加えた。「万葉集」の中でも、畿外では最もとなる三百三十七首の「越中万葉」の文学的な価値とともに、北陸の自然にふれて大きく開花した大伴家持の歌作りの心に迫る。

「劔岳（点の記）」を読んで  
受け継がれる先人の思い

富山中部高等学校二年 辻井 優里奈

今は通ることも少なくなったが、小学校への通学路から、立山連峰を一望することができた。その中に、私を魅了した山があった。切り立つ山容を変えることなくそびゆる山。それが劔岳だと知ったのは、ずっと後になってからだった。

劔岳は、立山信仰では針山地獄とされ、立山連峰の頂から参拝する山であり、登ることが禁じられていた。また、弘法大師が草鞋千足を費やしても登頂できなかったといわれるほど厳しい山でもあった。当時前人未踏といわれたこの山に、日本地獄最後の空白地帯を埋めるため、測量官の柴崎芳太郎が仲間と共に挑む。だが、その道のりは決して平坦なものではなかった。立山信仰から、劔岳を畏怖する地元住民の反発もあり、柴崎は準備段階から幾度も壁にぶつかる。しかし、彼を心から支える長次郎らの協力で、彼はその任務を見事に達成するのだった。

登頂の瞬間、柴崎の心の中に去来したものは何だったのだろうか。測量が大切だと理解しながらも、信仰上、また、芦焔の案内人としてのプライドから、柴崎の手助けを断る佐伯永守の心情、長次郎を快く思わない村人の存在、測量隊をだしぬこうとする山岳会の動向、軍の思惑……。いや、そうではない。柴崎は、ただ純粹に任務を全うしようとしただけなのではないか。自身の名誉のためでも、国のためでも、利益のためでもなく、ただ自分の仕事に誇りをもって、未知なるものに挑んでいたのだ。その姿に、長次郎もおのれを投げ捨て尽くしたのだと思う。だからこそ、登頂を争った山岳会のメンバーも、最後は誰よりも柴崎の功績を理解し、最大の敬意と賛辞をおくったのだろう。これは、山に挑む者たちのみがわかちあえるものなのかもしれない。山の頂で見た景色は、厳しい自然を制覇した者たちのみに許される、至上の美しさだったにちがいない。

誰かが行かなければ、道は開けない。柴崎らは、恐れることなく「道」を進んだ。だが、その「誰か」になることは、容易なことではない。山岳会もその「誰か」になるため、当時登山技術で先頭をゆくヨーロッパ製の装備で挑戦した。一方の測量隊は、未発

「春を背負って」を鑑賞して

高岡高等学校二年 鈴木 倭文華

この作品は、立山連峰で山小屋を営む厳格な父に育てられた長嶺亨が父の訃報を知らされ、富山に帰ってくるころから始まる。亨は、父から遠ざかるように東京で、金融の世界で会社の歯車として働いていた。そんなある日、山小屋に来ていた登山者の救助のときに滑落して亡くなった父の遺志を継ぎ、仕事を辞めて山小屋を続けることを決意した亨は董小屋のスタッフ、愛ちゃんと亡父の旧知、ゴロさんと経営を始める。その中で、失敗したり、後悔したりして山の厳しさを亨が理解していく。ゴロさんの過去、愛ちゃんの心の傷に触れ、お互いを欠かせない存在と感じ始めた三人。その後も、突然倒れたゴロさんを背負い、岩ばかりあるところを通ったり、雪の山道を必死で進み、助けようとする姿は、本当の家族のようだった。

木村大作監督は映画の舞台を奥秩父から、立山連峰の標高三千mを超える大汝山に建つ山小屋に変更した。山頂から見える三六〇度からの大自然を背景にした、美しい四季の移ろいや「人は皆、何かを背負って生きていくしかない」という監督の人生哲学に高地の山小屋は様々な想いを背負った人がたどりつく場所としてふさわしかったから選ばれたそうだ。

私は、この映画をみて二つのことに感動した。まず一つ目に、この映画はCGがほとんどつかわれていないということだ。木村監督は自然の厳しさを撮るためにスタッフ全員で大汝山に荷物をもって登ったり、撮影のたびに四〇キロの荷物をもって移動したり、環境状態の悪い中撮影を行ったりした。今日、CGを使わないことはなかなかない時代になっている。その中で、あえて使わないことは相当の努力が必要だったのではないかと私は思う。映画では、大雨や雪の積もった山道などをCGなしでとることで観客にその場の緊迫感を伝えやすくなる効果がある。また、私は霧や雲の切れ間にみえる雄大な自然はCGなしで撮るからこそ人々に感動を与えているのだと思った。二つ目に、立山連峰の美しさと、厳しさだ。立山は通学の電車の中や道を車で走っているときによく目にするが、近くで見ると遠くで見るとでは

違な測量技術と登山装備。しかし、最後にその「誰か」になったのは測量隊だった。また、そのことは、最新式の機械に長年の経験が勝ったことを意味した。藁の中に湿気がこもっていると翌日も雨だが、こもらなかったら雨が上がるという古くからの知恵。この経験による勘に、柴崎は幾度も助けられてきた。私利私欲もなく、人を信じたからこそ開くことができた道に、私は日本の心を見た。そしてそれは、私たちが今、失いつつあるものであり、日本人として忘れてはならないものである。

修験者は言った。「山は神であり仏でもある。劔岳も例外ではない。あなたが劔岳に登ることに重要な意味がある。」と。つまり、劔岳は特別な山ではない。登ることで、山の気や靈気に触れ、人間本来の姿に戻ることができる。だから、山は、神であり仏でもある。その道を柴崎に開いてほしいと言ったのではないだろうか。

劔岳に挑む柴崎に、修験者は言い残した。「雪を背負って登り、雪を背負って帰れ。」と。この言葉は、おそらく、劔岳に挑むならば大雪渓を通れという助言だったのだろう。実際、柴崎らは大雪渓を通過して劔岳登頂を果たしている。だが、私には「いかなる困難を背負おうとも、逃げることなく進め。そうすれば必ず道は開ける」という思いがこの言葉に込められているのではないかと思えた。

奈良時代ごろに、先人が劔岳の頂上に残してきた劔はすっかりさびてしまった。だがそれから千年以上を経た今でも、その先人の言葉は現代を生きる私たちにまで受け継がれているのだ。目を閉じると、修験者の言葉が私の耳奥にこだまする。



劔岳 点の記  
新田 次郎/著 文藝文庫刊  
日本地図を完成させるため、不可能と言われた初登頂と山岳測量に取り組んだ主人公の不屈の努力、山を愛する人々の友情を描く。山頂で発見された千年前の錫杖が解けない謎として心に残る名作。映画化された。

全然違う。私は、小学6年生の時に雄山に登ったことがある。それまでは、「なんてきれいな山なのだろう。夏にも雪が見られるなんてすごい。」としか思っていなかった。近くで見るとみるこによって、岩がたくさんある様子、山ならではの高山植物が生えている様子などたくさんことに気づくことができた。この映画には、立山連峰だからこそ、実際に登って撮影されたからこそ撮ることのできた自然の美しさがある。

私が思う立山の魅力は、夏でも雪のある景色と厳しい山道を登り切った後に見える美しい景色だと思う。昔は、修験者の修行の場、地獄や極楽浄土にたとえられた立山。この自然を表現するのはとても大変だったと思う。このような素晴らしい映画を見ることができて本当に良かった。



春を背負って  
笹本 稜平/著 文藝文庫刊  
奥秩父の山小屋を舞台に、山を訪れる人々が抱える人生の傷と再生を描く感動の山岳ヒューマン小説。二〇一四年に映画化された。立山連峰で長期のロケを行い、山々の光景を映し出した映像は圧巻。

「高志の国を描く」

富山中野高等学校二年 安田 健人

木陰を抜け横断歩道に差し掛かると、晩夏の日差しが首筋を焦がすのを感じた。冷房を効かせた部屋に閉じこもっていて、忘れがちであった夏の猛威を思い出し、辟易しつつも、熱気と蝉の声の中に全身を委ねてみると、不思議と充足感が得られた。サドルから腰を上げ、体重を乗せてペダルを漕ぎ出すと、正面から吹きつけ耳元の空を切り裂いていく風が心地よく感じられた。自宅に向かってしばし自転車漕ぎを進めると、視界に白い天守閣が飛び込んできた。堂々と聳え立つ天守閣の白さは、美しくもあり、一方でどこか無機質なものである。城址公園とともに、戦後になってから補修された城は、身を包む光を松明からライトへと変え、夜には燦然と輝く。城という、いかにも歴史的な建造物でさえ、時代の波に押し流され、その姿を変えていくというのは、当然のようで、驚くべきことだ。その美しさは心動かされるものではあるが、苔一つ無い純白の城壁を見ると、一抹の残念さを感じてしまうのだった。

さらに道を進んでゆくと、背後から金属の軋む音が近づいてきた。やがて音は自分の真横を通過し、前方へと消えていく。

市電の歴史は大正にまで遡る。錆付いたレール、そして眼前を走るレトロ電車は、その長い歴史を感じさせるものであった。かつてこの高志の国を生きた先人たちもあの車窓越しに何を見て、何を感じていたのだろうか。市電に揺られていると、ついそんな感慨に耽ってしまうものである。全身を揺らす振動は、まるでこの大地に脈打つ鼓動のようで、長い歴史の果てに自分が生きていることを、実感させてくれた。それにしても、コンクリートのビル群の中を何食わぬ様で走り抜けていくレトロ電車というのも、なかなか興味深い光景である。

市街を抜け、家の近所の見慣れた風景の中を進んでいく。耳を澄ませば、涼やかな川のせせらぎが聞こえてくる。川の側まで行くと、何の気なしに立ち止まってみる。

いたち川。常願寺川と神通川を結ぶ川であり、宮本輝氏の描いた、『蜚川』の舞台。緩やかに流れるこの川を見ていると、先日訪れたパリの中心部を流れる、セーヌ川の光景が思い出された。すべてが日本ではありえないような風景で、まさに異国

といった印象を受けたものだった。

そんな異国の川を訪れてから、今一度このいたち川を見てみると、川の醸し出す雰囲気も、また特別なものを感じられた。ありふれた川の風景でしかなかったものも、ここでしか見られない唯一の景色なのだ。

文明の発展により、私たちは世界の全貌を見ることがさえ可能になった。もし世界中の全ての川を見ることができたら、このいたち川も今までにないような姿を見せてくれるのだろうか。

宮本氏の目にこの川はどう映っていたのだろうか。その目には、人間の生死の光と闇が投影されて見えたのかもしれない。

今自分の目に映るいたち川は、彼の目には決して映らなかった輝きを放っているように思えた。優劣は存在せず、それでいて、その時代を生きるものにしかならない姿。

宮本氏は、市電を、富山城を、いたち川を描いた。彼にしか描けない高志の国を。それならば、今自分の生きる高志の国も、自分にしか描けないものなのではないだろうか。ライトアップされた富山城も、ビル群を走る市電も。セーヌ川を見た後のいたち川も。

気付けば、夕日が川に差し込んできた。川面が赤に染まる。さながら、川一面の蜚が燃え上がるように。

川の流れば止まることが無い。同じ水は一箇所に留まらない。その様はまるで時間のようで。それでも、移りいながらも確かに変わらないものがきつとある。この国には、そんな先人たちの意志が刻み込まれている気がする。

そして旅路を終え、高志の国を描き出した今、向かい合っているのは紙と硯ではなく、モニターとキーボードである。



蜚川・泥の河  
宮本 輝 / 著 新編文庫刊  
昭和三十年代の富山城を舞台に、父親の事業がうまくいかない中で、少年の淡い恋の目ざめと人間の成長を描く。雪国ゆえの豊かな水の描写や、春の喜びとともに蜚の乱舞する情景は圧巻。芥川賞を受賞。

命、思い、そして記憶は生きている

砺波市立出町中学校三年 北村 友希

この作品の題を目にしたとき最初に浮かんだ印象は、葬式の場に流れるあの何とも言えない、独特の空気感だった。

私はこの映画「おくりびと」を観た後、小説版の方も読むことにした。映画の方は情景と音楽、そして役者の活き活きとして、くるくる変わる表情豊かな表現力が重なり合い、見応えのある作品だった。一方、小説の方はというと、私の思ったこととは著者の百瀬しのぶさんの描く主人公大悟の心の葛藤、そして文章の構成の上手さに読んでいる方はその光景を思い浮かべ、納得したり、登場人物の心境を共に共感したりとその世界に深く深く入り込むことができる見事な作品だったということだ。実際、私も途中からはページの先に練り広げられる話の行方はもちろん、主人公の変化などが気になって気になって、深夜寝床からそっと起き出し本を手に読みふけていたことを思い出す。

さて、この物語で私は大きく二つのことについて考えた。一つ目は「納棺」という仕事に対する世間一般の目である。物語が更に展開を迎える序章となった、主人公大悟の納棺師としての職業がとうとう友人の山下、そして妻の美香に知られてしまった場面。山下は大悟に向かい、「もっとマシな仕事に就けよ。」

と吐き捨てる。美香の方はというと、「恥ずかしくないの?」

という言葉で大悟に言い放っていたところだ。

私の意見として言うと、初めは大悟のように遺体に触れることは正直気が引け、違う職につきたいなと思った。しかし、今は違う。いつかは死ぬのが人間、そして生物の運命だ。そうして人間は次世代へ命をつないで繁栄してきたのだ。だが私は、そんな運命だとしても一人一人、個々の人生を歩み、時の中ではたった一瞬でも輝いた命が、たった一人で死に逝くのは寂しいと思う。だからこそ葬式、そして納棺

師という役目に就く人々がいるのだと感じた。

主人公大悟の友人や妻のように納棺の仕事などを好ましく思わない人々の気持ちは、世間の見方そのものだろう。だがそうではない人もいる。身内などを亡くした人々のことだ。そんな彼らにしてみれば、納棺や葬式には悲しみもあるが、感謝の心もあるだろう。人生を生きた、そして安らかに眠ってほしいという皆の思いを抱えて棺の中に大切な人を納めてくれるのだから。

納棺師とは、感謝され、遺された人々の気持ちを抱えて魂を送り出してくれる、とても人の為になる仕事であるということを私は多くの人に知ってほしいと強く思った。

二つ目は、少年時代の父が父親と河原で丸い石を渡し合い、そして物語の最後に、今度は大悟が妻にその石を差し出した場面でのことだ。最初は私も石に対しては何も思うことはなかったのだが、ふと石は大悟の父親の、そして大悟の心を分け与えた一つのバトンという意味を持つことに気がついた。その考えに至ったのは小説版の最後から二番目の文だった。

「父が握っていた石と、美香の手と、大悟の手と、新しい命と・・・」

まるでバトンのように、愛情が、意思が、優しさが伝わっていくのが見える文である。私はまだ中学生なのだが、それでも親から受け取ったあふれる程の愛情を、将来自分の子供にも注ぎ込まなきゃな、という気持ちで芽生えた。

この作品を通して、私は命をつなぐ、という意味、そして生と死について考えを更に深めることができた。そしてもう一つ、心に残った言葉がある。人生は良い事より嫌な事の方が圧倒的に多い、と母が教えてくれた。一人でも歩き出せるように。強い心を持って。もうすぐ、春が来るよって。



納棺夫日記  
青木 新門 / 著 桂書房  
死者の体を清め棺に納める仕事に就いた著者が、死にゆく人の穏やかな顔や感謝の言葉に、人間の命の本質を悟っていく。著者の静かなる声が心に残るロングセラーとなった。詩と童話を付した定本。

『越中万葉かるた』を読んで  
未来へ向かう越中

高岡南高等学校二年 中村 有紀子

私は小学校高学年のころ、越中万葉かるたに熱中していた。万葉かるたクラブに所属し、大会には団体戦のメンバーとして出場していた。夏休みには、かるたの絵に描かれている場所や万葉集の歌碑が建てられている場所をめぐって、伏木や氷見を旅したこともある。一つ一つの歌に込められた想いや越中の国の風土・歴史をかるたを通して味わうことができ、とても楽しかった。私はどんどん万葉集に魅了され、それまで苦手だった国語の授業も身近に感じられるようになった。都から来た大伴家持をはじめとする歌人たちは、実際に風景を見たり土地柄を感じたりして歌を詠んだそう。だから万葉の歌は気持ち素直に表現されていて、力強い。それが、私が万葉集の中でも越中万葉歌が好きで理由の一つである。

多くの歌の中で、私が特に大好きな歌が三首ある。

大野路は繁道森径繁くとも

君し通はば径は広けむ

三三八一

歌に出てくる「大野路」とは、私が住んでいる高岡市福岡町の大野だという説もある。もしそれが正しいとしたら、私が歩いた道を千二百年以上前にこの地に赴任した人々も歩いたかもしれない。同じ場所から同じ景色を見たかもしれない。そう思うと、歌が詠まれたのがそれほど遠い昔ではないような気がしてとても不思議な感覚になる。

馬並めていざうち行かなあは深溪の

清き磯廻に寄する波見に

三九五四

一行が磯に打ち寄せる波を見に出かけた時の歌だ。家持らが越中国で暮らした約五年間、多くの出会いや別れ、旅立ちがあったことを感じさせる歌だと思う。当時の人々も、喜びや悲しみ、決意といった様々な感情をもって海を眺めていたのだろうか。現代の私たちと共通するところがあると思った。また、かるたの絵にもあらずらしい形の大岩は、JR氷見線雨晴駅付近の海岸に多く存在し、実際に見ると

とても神秘的だった。

英遠の浦に寄する白浪いや増しに

立ち重き寄せ来あゆを疾みかも 四〇九三

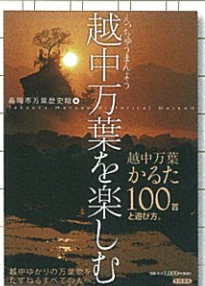
あゆの風が強く吹いて、海岸に白い波がしきりにうち寄せる様子が詠まれている。私がこの歌を好きな理由は、かるたに描かれた絵にある。氷見を訪れたとき、私はその絵と全く同じ形の崖を見つけた。もちろん絵はあとから描かれたものだから、その場所で歌が詠まれたとは限らない。しかし、当時と変わらない美しい自然が今も残っていることに感動した。それと同時に、この豊かな自然や私たちが見ている風景を守り続け、後世に伝えていく義務が、私たちのような若い世代にはあると強く感じた。

二〇一四年夏、北陸新幹線の試験走行が行われた。特に初日は多くの人々が走行に注目し、テレビをつけても新幹線の話ばかりだった。試験走行だけでも十分に盛り上がっているのに、来年三月に開通したら、どんなに人々は喜び、まちは活気づくだろうか。私はひとつの出来事にみんな喜び合い、元気になることがうれしい。家持らも、越中が人々の交流の場として生き生きとした明るい国になることを願っていただろう。私は、美しい自然と長い歴史をもつこの富山をいつまでも大切にしたいし、未来に向けてさらに発展して欲しいと思う。

越中万葉を楽しむ

越中万葉かるた二〇首と遊び方

高岡市万葉歴史館／編 吉岡書院  
「万葉集」の中から越中間連歌百首を選び、小倉百人一首のようにかるた形式にした「越中万葉かるた」をわかりやすく紹介。



長い道

『長い道』を読んで

魚津高等学校二年 松井 亜莉沙

今年八月十五日。終戦から六十九年を迎えた。時間が経つにつれて戦争を経験している人が少なくなり、だんだんと戦争があったという事実から遠ざかりつつある。人々の心からそのことが忘れ去られるということはあってはならないことだ。そんなとき私はこの「長い道」という本に出会った。富山が舞台であり有名な「少年時代」という映画の原作である。

戦争はつらく厳しく残酷なもの、わかっていることだが私はこの本を読んで、改めてこのことを痛感させられた。そして一番深く考えさせられたのは「友情のあり方」である。主人公にとってあまりにもつらい終戦までの「長い道」は私の人生においての考え方に大きな影響を与えたのだ。

縁故疎開をすることになった主人公「潔」を疎開先で待っていたのはいじめであった。周りからは仲間はずれにされ、潔のことを歌詞にしたひどい歌を歌われ、色々な命令をされたり嫌味を言われたり。私だったら耐えられないだろう。しかし潔は毎日学校に行き続けるのだ。

「休んだりしたら負けたことになる」

潔は強かった。戦争で戦っている日本と同じように彼は戦っていた。彼は自分と戦っていたのだ。学校に行きたくないと思う弱い自分を抑えようと必死だったのだと私は思う。

人生の中で最も多く戦う相手となるのは、きっと「自分」であるだろう。将来において重要な選択を行うとき、厳しい壁にぶつかったとき、あきらめたいと思ったとき。そんなときに生まれる「不安」「絶望感」「失望感」、それらに打ち勝つことで成長し強くなれるのだと私は潔の強さから学んだ。

そして私はこの本の中で友情について深く考えさせられた。そのきっかけとなった人物が潔のクラスメイトの「進」である。進はこの本の中で何度も私を混乱させた。学校以外では潔と友達のように接するが学校では潔を見放す。潔を仲間はずれにし

たクラスメイトに指示していたのも進であった。進の本心が何一つわからなかった。もしかしら本当は純粹に潔と仲良くしたかったのかもしれない。今までの自分の地位から抜けることができず自分を偽り続けていたのかもしれない。そう考えると進がかわいそうに思えた。

自分を偽るという行為は大きく自分を苦しめるだろう。自分の気持ちに反して物事を行うことほどつらいものはないと思う。ましてや友情に関しては特にだ。自分を偽ってまでクラスメイトからの信頼を得て、いじめの中心的存在になる、クラスメイトとさえも進は本当の友達ではなかったのかもしれない。進にとっても自分を偽りつづけた通学路はつらくて遠い「長い道」だっただろう。自分を偽らずに接することができる相手こそ本当の友達といえるのだと思う。

潔が歩んできた終戦までのつらくて過酷な日々は「長い道」と例えられ私の心に重くのしかかった。この話は全てが事実でないといえども、戦争中大人たちが必死で戦う傍らで、疎開で苦しむ子供たちもいじめに負けず必死で戦っていたことを知った。戦争はもう決して起こってはいけないものだ。しかし、「長い道」に耐え、必死で戦ってきた潔たちには、私にはない「強さ」があった。戦争を機に成長した彼から学んだことはたくさんある。それらを忘れず生きることがこの本と出会った最大の意味になると思う。

「自分に忠実に生きる」私が一番に残った潔の言葉を胸に私は人生の「長い道」を歩んでいく。歩み終えたその時、私は強くなれているだろう。

長い道

柏原 兵三／著 桂書房



戦時中、父の郷里に疎開した少年の苦しい体験と成長を描く。著者が終戦までの一年ほど、東京から旧上原村（現入善町）に疎開した経験をもとに書き上げた自伝的小説。映画「少年時代」の原作。

『螢川』を読んで

小杉高等学校三年 渡辺 瞳

「螢川」を読んで一番印象に残ったのは、竜夫が春枝を駅まで送っていく場面です。春枝の登場する場面はほんの少しだけですが、竜夫や重竜、千代への思いが伝わってきて、素敵な人だと感じました。

春枝は重竜の先妻で、千代に子供ができたことで一方的に別れを告げられてしまいました。二十年も連れ添ってきたのに、「子供」が理由で離婚することになった時、とても悲しく悔しかったと思います。初めは重竜のことを恨んだかもしれませんが、しかし、小さな竜夫を自分に会わせてくれた時、以前と変わらず気が良く明るい性格の彼のことをやっぱり大切な人だと思ったのだと思います。

春枝にとって千代は、本当は一番恨めしい存在だったことでしょう。しかし、自分には与えることのできなかった「子供」を重竜に与えてくれ、その子・竜夫をちゃんと育ててくれた春枝に対して、次第に感謝の気持ちを抱くようになっていったのではないだろうか、と思いました。

竜夫については、自分の子供のように大切に思っている様子が伝わってきます。しかし、自分は本当の母親ではないし、「母親」になったことがないから、春枝は、竜夫とどう接して良いか迷ったり、悩んだりしているようでした。だから、見送りの車の中で、本当は少しでも長く竜夫と一緒にいたいけれど、少ししか会話をせず、竜夫をずっと見つめていたのかな、と思いました。

商売に成功してお金はあっても、「家族」のいない春枝にとつて、重竜の子供である竜夫は、唯一「家族」として感じる事ができる存在だったのでしよう。だから、二人が別れる場面では、自分を忘れないでほしい、また逢ってほしいという春枝の切ない思いが伝わってきて、とても印象に残りました。

三人をそれぞれ大切にしている春枝の優しさがとてもよく伝わってきて、春枝のことが好きになりました。

しかし、この作品の一番の見せ場は、やはり最後の「螢の大群」の場面です。

文芸部門・散文 佳作

『剣岳点の記』を見て

砺波市立出町中学校一年 松本 一真

立山連峰は、富山県のシンボルとして存在し、晴れた日には砺波平野からも一望することができ。その美しい稜線は、三千メートル級の山々が、大自然の屏風のようにそびえ立ち、私もこの景色が大好きだ。

なだらかで美しい稜線の中で、一つだけ針のように尖った黒い山が剣岳だ。

私は、五年生の時に父と室堂から一ノ越を経て、雄山に登ったことがある。遠くからは、なだらかに見えたが、そこに行く足元に岩がゴロゴロしていて、一歩一歩気を付けながら、急な斜面では両手を使って必死に登った。

山頂に着いたときには、とても疲れたが、そこから見た景色は、山々を見下ろすことができ、青い空、風を感じ、いっぺんに疲れが吹っ飛んだ気がした。山頂にある神社の前で一休みしていたとき、すぐ横に剣岳が見えた。山頂から近くで見ると、雪が積もらないほどの絶壁で、とても人間の力で登ることができないように思った。

「剣岳点の記」は、明治の終わり頃、これまで人が登ったことがない剣岳に、当時の日本で、地図の制作をしていた陸軍が山の高さを調べるため、測量に必要な三角点という物を山頂に設置するため、名誉をかけて登頂を目指す物語である。私は、映画を見ながら、なぜ危険な思いをしてまで剣岳に登らなければならなかったのか、たかが山登りの成功が名誉と言えるだろうかということに疑問に思った。

陸軍陸地測量部の柴崎芳太郎は七人の測量隊で剣岳に挑む。この姿にはかっこいい男らしさを感じ、これまで誰も登頂できなかった山に、たった七人でどのように登頂できたのかということに興味を持った。

柴崎は山登りの案内人として宇治長次郎という人に出会う。しかし、立山は信仰の山で、剣岳は死者の山と呼ばれ、決して登ってはいけない山とされていたため、最初長次郎も断ったほどであった。長次郎は、今の大山町に住んでいて、山登りのためのいろいろな知識を持って、柴崎のサポートをした。長次郎との運命的な出

文字で書かれているだけなのに、まるで映像を見ているように、頭の中にその場面が浮かんで来て、不思議な気持ちになりました。

何万何千もの螢が飛び交っている様子は、とてもきれいだろうなと思うと同時に、少し怖さも感じました。

「螢」は、人間から見ればちっぽけな存在だけれど、短い命を必死につなげようと発光して、飛んでいます。それらが目の前に数え切れないほど広がっていたら、人間の方がよっぽどちっぽけだなと感じてしまいうでした。

千代は螢にこれからの人生を賭けていたけれど、実際に螢を見終わった後には「終わった」という気持ちが千代の中に生まれていました。大阪に行くか富山に残るか悩んでいた自分がちっぽけに思えたのかもしれない。最後にかすかな悲鳴がこぼれたのも、人に群がり形をなした螢のかたまりを見て、怖さや恐ろしさを感じたのだろうと思いました。

「螢川」は、富山を舞台にしていることもあり、情景を思い浮かべやすい作品でした。細やかな表現で進められる物語は、とても読みやすかったです。竜夫と母親の千代を中心に話が進む中で、登場する人たちの思いをそれぞれ感じることができ、感動しながら読み進めました。

竜夫と千代はきっと大阪へ行ってしまうと思うけど、「螢」の記憶は絶対に消えないと思うし、また富山に戻ってきてほしいな、と思います。私も、故郷を大切にし、今まで見たり、感じたりしたこと、そして、これから見て感じるものを忘れないように大事に過ごしていきたいと思います。

会いが、柴崎の成功につながった。

私にもこれまでにたくさんのお会いがあった。父、母、祖父、祖母、保育園や学校の先生、友達、これからもたくさんのお会いがあるだろう。そのひとつ一つに意味があり、共に助け合い、いろいろな事を成しとげているのだと思う。

柴崎と長次郎は何度も失敗する中、ある時、岩穴で仙人に出会い「雪を背負って登り、雪を背負って降りよ」という言葉をもらう。

映画ではその意味を詳しく説明していないが、父に聞いたところ、「地面を歩いていけるだけでは登れない。残雪を利用して雪が積もったところを歩けば登頂できる。」という意味ではないかなと教えてくれた。あたり前の事だけをやっているともうまくいかないのなら、これまでとは違うことを考え、実行してみることが成功のカギになるのだと思った。

インターネットで調べると、柴崎が登頂したときに一等三角点の石標は設置できず、棒と板を二枚組み合わせた四等三角点が設置され、大正元年に地図に二九九八メートルと記された。

一等三角点は、柴崎の登頂から百年を記念して平成十六年に設置され、平成十七年に剣岳の高さは二九九九メートルとなった。

これを知って、私は、「あと一メートル、おしい。」と思った。昔の人の苦勞を知って、絶対三千メートルを超えて欲しいと思ったからだ。

高さを変えることはできないが、これからも富山県には変わらず、立山連峰、剣岳という大自然があり続ける。これによって人々の心をなごませ、ある時には挑戦する気持ちを持たせてくれる。私は、難しい目標でも、出会いや仲間との協力、そこから生まれる新しい考えによって、前進できるということを学び、勉強やスポーツに挑戦していく気持ちを大きく持った。

『おおかみこどもの雨と雪』を読んで  
四掛ける十五とふるそと

富山高等学校二年 小林 ゆきの

青い空に溶けこむ山と海  
菜の花畑とお日さまに  
囲まれて輝く家族の笑顔  
群青の稲を駆ける薫風に  
覚えのある気配とともに  
聞こえてくるのは友の声  
実りの季節と言うけれど  
黄金に浮かぶ白玉よ  
見つめているのかあの人も  
障子を開ければ銀世界  
鯨と白波のように遊んでは  
あなたと寄り添う温かさ

希望の花

立山信仰の世界『富山の知的生産』を読んで

富山市立和合中学校二年 冬木 翔大

地獄に落ちた 若い娘は  
三井寺の 僧に会い  
鬼神と思い 僧は逃げ  
娘は僧を 呼び止めた  
父母を敬い 打ち明けた  
地獄を去れど 十八日  
血の池地獄 どれどろろ  
掻き消すように 願ひ去る  
助けてくれと 父母願ひ  
夢で無事だと 微笑んだ  
一面に咲く 蓮の花  
空の彩り 花畑  
雲に聳ゆる 地獄山の  
みやまきんばい ちんぐるま  
今もその地で 咲き誇り  
浄土の微笑 淡い夢



この一冊  
おおかみこどもの雨と雪  
細田 守／著 角川文庫  
大学生の花は、おおかみおとこに恋をし、雪と雨の姉弟が生まれる。都会の片隅でひっそりと暮らす四人だが、おおかみおとこの死を機に、田舎町に移り住む。映画原作にして細田守監督初の小説。



この一冊  
立山信仰の世界  
「富山の知的生産」  
富山学研究グループ／編 北日本新聞社  
「栗尻」をはじめ、富山の先人は色々な形で、多くの貢献を世の中に果たしてきた。いずれも、叡智と努力が生んだ「知的生産」である。この先人の知的貢献を「知的生産」という新しい観点からわかりやすくまとめている。

文芸部門・短歌 銀賞

『劔岳へ点の記』を読んで

富山高等学校一年 浦田 彩乃

夕陽うけ

茜に燃ゆる頂は

測量隊の情熱映す

文芸部門・短歌 銀賞

『納棺夫日記』を読んで

魚津高等学校一年 八ツ橋 佑華

今触れる

冷めたその手は

いつの日か

誰かと愛を

繋いだその手

文芸部門・短歌 銀賞

『春を背負って』を読んで

富山高等学校一年 榎 亮太郎

立山の大地と「生」

残雪の

まぶしき立山

仰ぎ見て

この地に生まれし

わが身の幸せ

文芸部門・短歌 銅賞

『大人になる前に身につけてほしいこと』を読んで

南砺福光高等学校一年 中島 幸也

思春期

「大人」って

何ができたら

「大人」なの？

誰も教えてくれない答え

文芸部門・短歌 銅賞

『万葉集』を読んで

新湊高等学校一年 柳原 圭吾

悠久の自然

夏涼し

草木も青く

耳澄ます

聞こえてくるは

自然のラジオ





文芸部門・短歌 佳作

『とやまの博物館・文化施設を詠む』を読んで

巖浄閣

南砺福野高等学校一年 中町 美涼

短い刻とき

儂く散りゆく

夏花火

長き巖浄閣の

歴史は消えぬ

文芸部門・俳句 金賞

『劔岳（点の記）』を読んで

劔岳

富山高等学校一年 石倉 里利佳

劔の穂

虚空の先を

望むかな

文芸部門・俳句 銅賞

『ダモイ遙かに』を読んで

ダモイ

魚津高等学校一年 内生蔵 颯人

つるの群れ

ダモイし渡す

最後の便り

文芸部門・俳句 銅賞

『螢川』を読んで

小杉高等学校三年 河原 ななみ

夏の夜

命のかぎり

輝く舞

文芸部門・俳句 銅賞

『春を背負って』を読んで

立山連峰

富山市立山田中学校二年 土田 佳奈

雪かぶり

大きく広がる

立山連峰

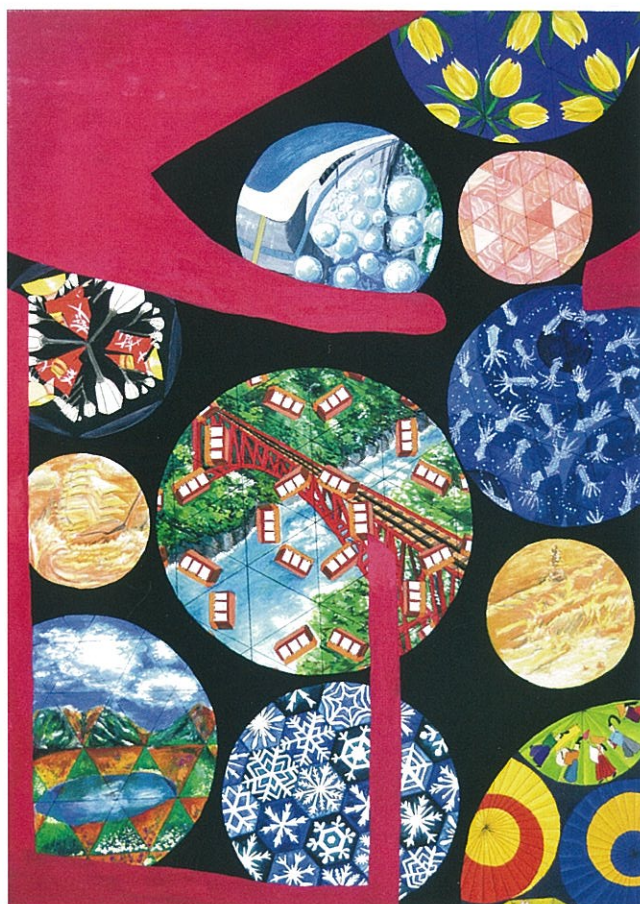




美術部門 金賞  
 「螢川」大畑 花鳴 (堀川中学校 3年)  
 <螢川> 575 × 410



美術部門 知事賞  
 「万葉想」磯部 遥 (高岡支援学校 3年)  
 <万葉集> 460 × 620



美術部門 銀賞  
 「富山を愛しています」幾島 杏菜 (富山中部高等学校 1年)  
 <ビジュアルワイド新日本風土記十六 富山県、富山 100年のあゆみ> 515 × 370

この一冊  
 ビジュアルワイド新日本風土記十六 富山県  
 市川 健夫 / 監修 ぎょうせい  
 富山県の自然と地形、歴史と事件、産業と経済、生活と文化、人物などを紹介。

この一冊  
 富山一〇〇年のあゆみ  
 富山県教育委員会 / 編 富山県  
 富山県が県として誕生した明治十六年からの出来事や暮らしを多くの写真を交えて解説。

【凡例】 部門名  
 題名 / 名前 (学校名・学年)  
 < > は原作 サイズ (タテ×ヨコ) mm

この一冊

映画「RAILWAYS」愛を伝えられない大人たちへ

RAILWAYS 2制作委員会

富山地方鉄道を舞台に、定年を目前にした実直な鉄道マンとその妻が人生の節目を迎えて様々な不安や迷いに揺れ動くさまを美しい風景をバックに描く。



美術部門 銅賞

「記憶の中に」石坂 桃佳 (富山北部高等学校 1年)

<RAILWAYS 愛を伝えられない大人たちへ> 594 × 841

この一冊

立山曼荼羅 絵解きと信仰の世界

福江 充/作 法蔵館

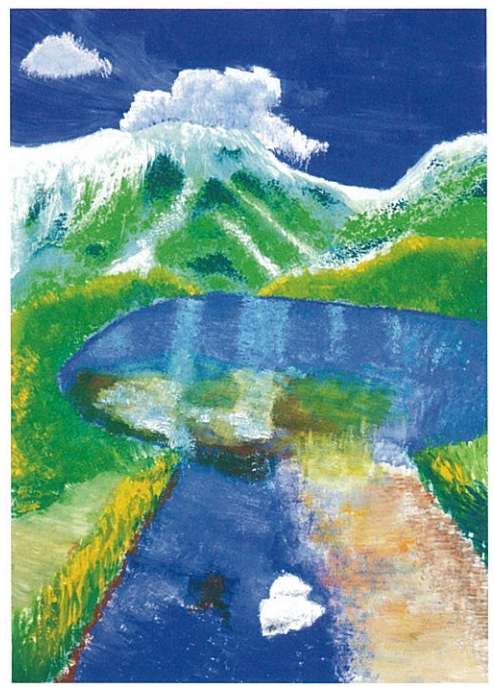
立山曼荼羅は、越中立山にかかわる山岳宗教、いわゆる「立山信仰」の内容が網羅的に描かれた掛軸式絵画。先人たちが培ってきた様々な思想・宗教が凝集された立山曼荼羅を読み解き、立山の信仰世界を探る。



美術部門 銅賞

「立山開山縁起」高野 花怜 (志貴野高等学校 3年)

<立山曼荼羅 絵解きと信仰の世界> 730 × 515



美術部門 銅賞

「立山」木下 奈鶴美 (小杉高等学校 2年)

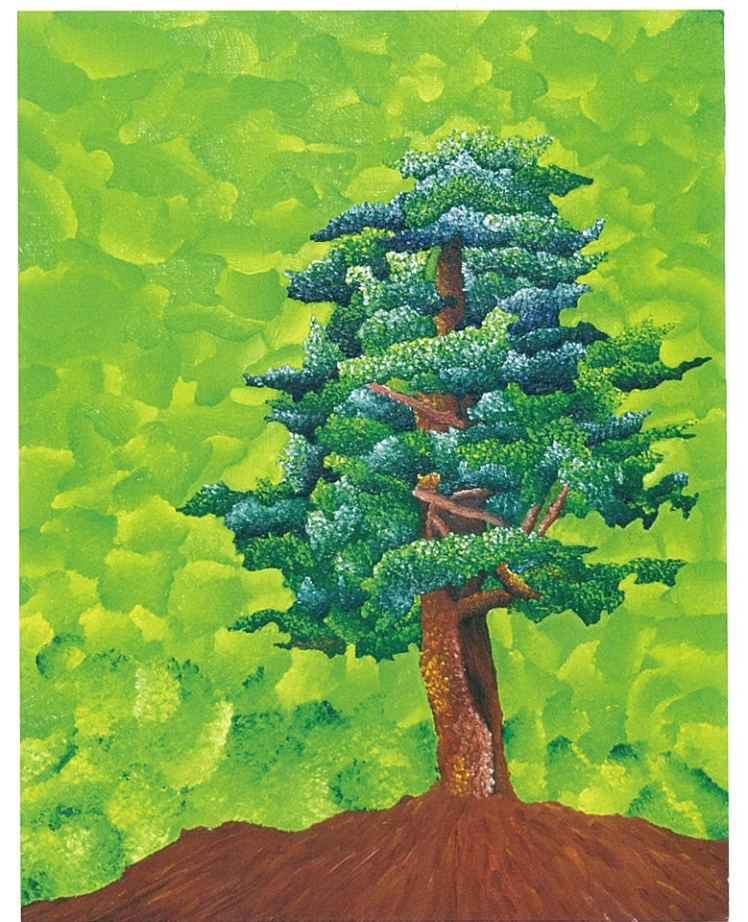
<おおかみこどもの雨と雪> 594 × 420

この一冊

山に入って草を刈ろうー草刈り十字軍17年の軌跡ー

足立原 貫/作 朝日新聞社

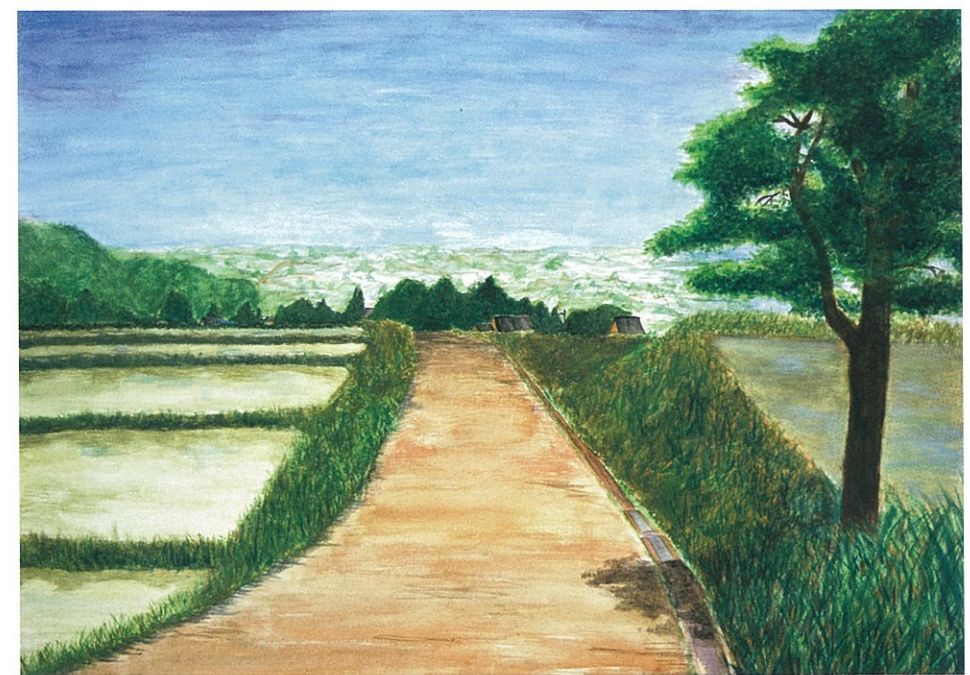
森林と水源を守るため除草剤散布に反対する国内外の若者たちが、自分たちで富山の造林地の下草刈りを始める苦難と感動の物語。



美術部門 銀賞

「深緑の光」齋藤 夢加 (南砺福野高等学校 1年)

<山に入って草を刈ろうー草刈り十字軍17年の軌跡ー> 535 × 445



美術部門 銀賞

「いつもの景色」西田 さくら (富山中部高等学校 1年)

<おおかみこどもの雨と雪> 465 × 620

写真部門

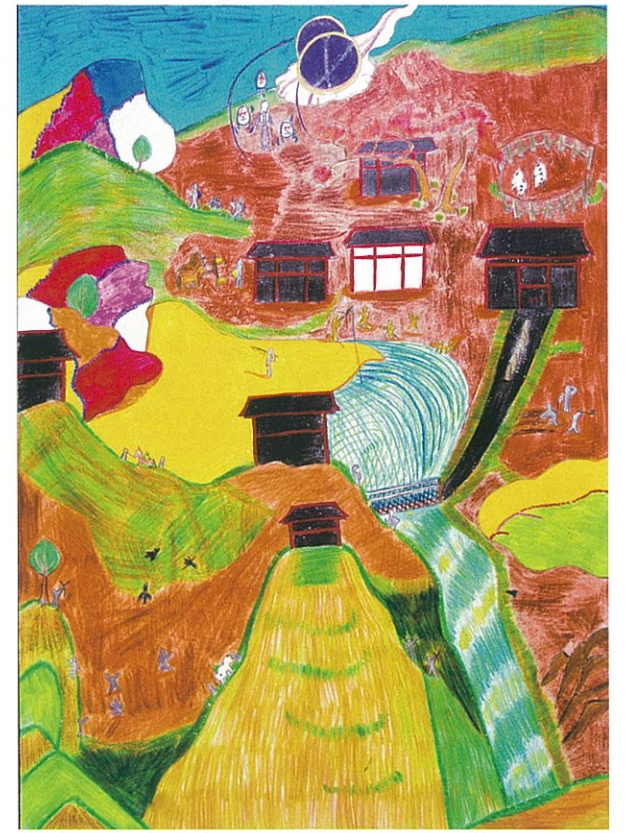


写真部門 知事賞

「恋の目覚め」石野 裕也 (南砺福野高等学校 2年)  
 <螢川> 254 × 365

【凡例】 部門名  
 題名/名前 (学校名・学年)  
 < >は原作 サイズ (タテ×ヨコ) mm

この一冊  
 立山縁起絵巻 有頼と十の物語  
 米田 まさのり/著 桂書房  
 立山曼荼羅に描かれた立山の開山伝説を親しみやすい物語として漫画で表現した作品。



美術部門 銅賞

「私の立山マンダラ」堀川 千香子 (高岡支援学校 3年)  
 <立山縁起絵巻 有頼と十の物語> 460 × 620



美術部門 銅賞

「夏の夜」宮崎 由衣 (小杉高等学校 1年)  
 <螢川> 594 × 420



写真部門 銀賞

「終止符」田川 千沙子 (富山東高等学校 2年)  
 <おおかみこどもの雨と雪> 305 × 203



写真部門 銀賞

「願いを込めて」矢坂 怜奈 (南砺福野高等学校 2年)  
 <富山の昔話> 365 × 254

この一冊

富山の昔話

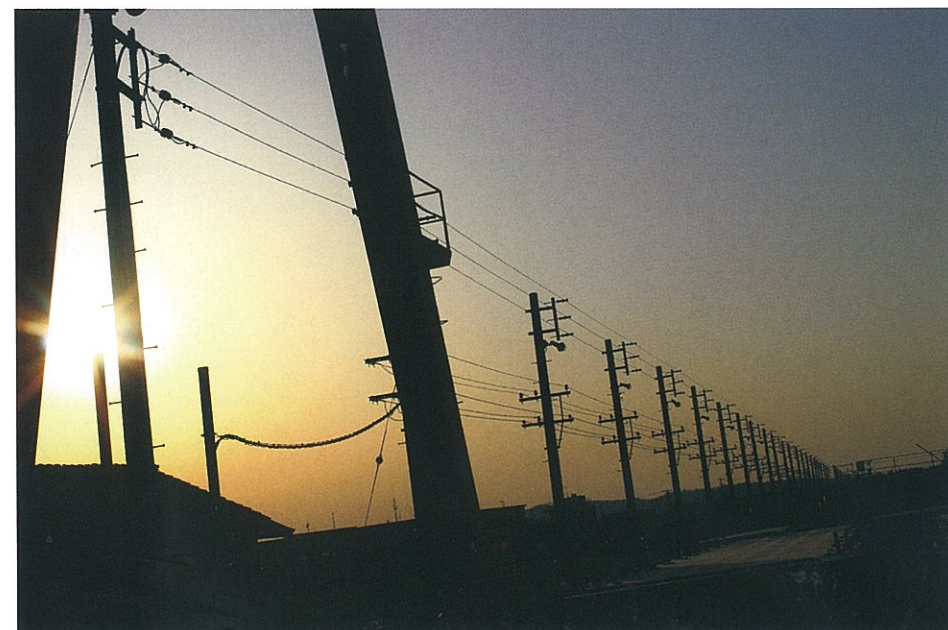
石黒 漢子 / 著 桂書房

「花の巻」「月の巻」「雪の巻」「風の巻」に分け、方言で語る  
 七十七の話を紹介する。



写真部門 金賞

「月夜桜」上田 眞 (富山東高等学校 2年)  
 <越中万葉百科> 254 × 365



写真部門 銀賞

「宵の光と影」川崎 稚奈 (南砺福野高等学校 2年)  
 <九転十起の男> 254 × 365

この一冊

九転十起の男

新田 純子 / 著 毎日ワンス

氷見市に生まれ、京浜工業地帯の生みの親と呼ばれる明治の  
 起業家、浅野総一郎の七転び八起きならぬ、まさに九転十起の  
 波乱の人生を描く。



写真部門 銅賞

「宇奈月温泉駅」能又 光二 (高岡第一高等学校 2年)

<高熱隧道> 305 × 203

この一冊

**高熱隧道**

吉村 昭 / 著 新潮社

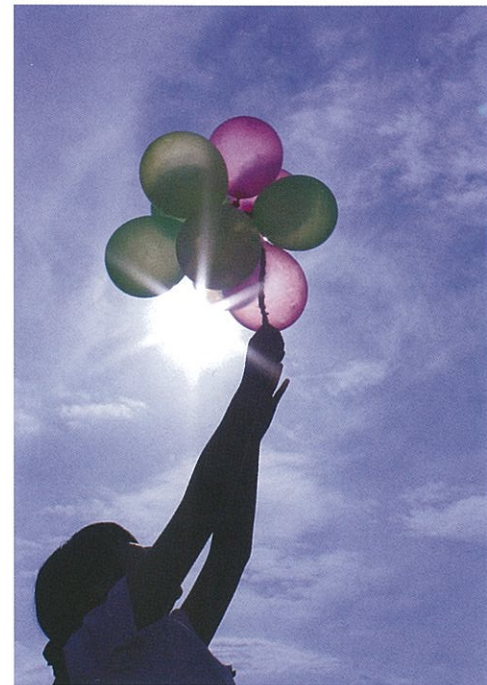
黒部川第三発電所の工事を技師の目から描いた小説。犠牲者の多さから富山県警察部が中止命令を出す、戦前の国策によって続けられた難工事を描く。

この一冊

**陽が昇るとき**

木々 康子 / 著 筑摩書房

高岡市出身で、日本美術をフランスに紹介し、印象派を日本人に教えた美術商、林忠正と、法律家、磯部四郎が、若き日にパリで学び、理想を追求する生き方を描く。



写真部門 銅賞

「光のアトリエ」堀川 みなみ (富山東高等学校 2年)

<陽が昇るとき> 305 × 203



写真部門 佳作

「おじいちゃんと桜の木」谷川 倅大 (泊高等学校 3年)

<春を背負って> 203 × 305

この一冊

**風のまにまに**

岩倉 政治 / 著 富山新聞社

福井の吉崎から始まった運如の越中の旅。この跡をたずねた二人道路の独特な絵とユーモラスな文による旅の足跡。富山新聞に掲載されました。



写真部門 銅賞

「風を感じて…」嶋田 愛子 (富山東高等学校 2年)

<風のまにまに> 203 × 305



写真部門 銅賞

「御来光に臨む語部たち」田島 慶太 (富山高等専門学校 (本郷キャンパス) 3年)

<万葉集巻17 4003番「敬みて立山の賦に和する一首 并せて二絶」> 254 × 305



写真部門 銅賞

「眠りゆく河」中村 朝子 (富山高等学校 2年)

<蜷川> 305 × 203

## 審査委員会委員

委員名	所属等
<委員長> 中井 精一	富山大学人文学部教授
金山 嘉宏	ミュゼふくおかカメラ館館長
川瀬 貴子	県中学校文化連盟美術専門部代表 (黒部市立鷹施中学校教諭)
熊野 真	高志の国文学館副館長
腰本 公彦	県高等学校文化連盟写真専門部会 (富山高等学校教諭)
柴田 利雄	県中学校文化連盟新聞・文芸専門部代表 (上市町立上市中学校教頭)
寺田 允美	県高等学校文化連盟文芸専門部会 (富山国際大学付属高等学校講師)
野島 峰彦	県高等学校文化連盟美術・工芸専門部会 (高岡高等学校教諭、県高等学校文化連盟事務局長)
橋本 文良	高岡市美術館副館長
広井 睦	富山県立図書館館長
相川 英文	生涯学習・文化財室次長

## 応募状況

応募総数 1,658点 (文芸 1,328点、美術 145点、写真 185点)

	部門	文芸				部門計	美術		部門計	部門計	総計
		校種	散文	詩	短歌		俳句	部門計			
応募数	中学校		27	1	10	2	40	3	3	0	43
	高等学校		558	17	389	324	1,288	140	140	185	1,613
	特別支援学校						0	2	2	0	2
	総計		585	18	399	326	1,328	145	145	185	1,658
	入選	知事賞		1				1	1	1	1
	金賞		1			1	2	1(1)	1(1)	1	4(1)
	銀賞		2	1	3	3	6	3	3	3	12
	銅賞		4(1)	1(1)	2	3(1)	10(3)	5	5	5	20(3)
	佳作		1(1)			1	2(1)	0	0	1	3(1)
	入選計		9(2)	2(1)	6	4(1)	21(4)	10(1)	10(1)	11	42(5)

( ) は中学生で内数

## 平成26年度「高志の国文学」情景作品コンクール入選作品一覧表

### ○文芸部門 (散文・詩)

賞	題名	分野	学校	学年	名前	題材
知事賞	家持の「心意気」を胸に	散文	富山高等学校	1年	松田 梨子	越中万葉百科
金賞	受け継がれる先人の思い	散文	富山中部高等学校	2年	辻井 優里奈	劔岳<点の記>
銀賞	四掛ける十五とふるさと	詩	富山高等学校	1年	小林 ゆきの	おおかみこどもの雨と雪
	「春を背負って」を鑑賞して	散文	高岡高等学校	2年	鈴木 優文華	春を背負って
	「高志の国を描く」	散文	富山中部高等学校	2年	安田 健人	壺川
銅賞	命、思い、そして記憶は生きている	散文	砺波市立出町中学校	3年	北村 友希	納棺夫日記
	未来へ向かう越中	散文	高岡南高等学校	2年	中村 有紀子	越中万葉かるた
	長い道	散文	魚津高等学校	2年	松井 亜莉沙	長い道
	希望の花	詩	富山市立和合中学校	2年	冬木 翔大	立山信仰の世界「富山の知的生産」
佳作	「壺川」を読んで	散文	小杉高等学校	3年	渡辺 瞳	壺川
佳作	「劔岳 点の記」を見て	散文	砺波市立出町中学校	1年	松本 一真	劔岳 点の記

### ○文芸部門 (短歌・俳句)

賞	題名	分野	学校	学年	名前	題材
金賞	劔岳	俳句	富山高等学校	1年	石倉 里利佳	劔岳<点の記>
銀賞	「劔岳<点の記>」を読んで	短歌	富山高等学校	1年	浦田 彩乃	劔岳<点の記>
	立山の大地と「生」	短歌	富山高等学校	1年	櫻 亮太郎	春を背負って
	愛故に納棺	短歌	魚津高等学校	1年	ハツ橋 佑華	納棺夫日記
銅賞	ダモイ	俳句	魚津高等学校	1年	内生蔵 郷人	ダモイ遥かに
	「壺川」を読んで	俳句	小杉高等学校	3年	河原 ななみ	壺川
	立山連峰	俳句	富山市立山田中学校	2年	土田 佳奈	春を背負って
	思春期	短歌	南砺福野高等学校	1年	中島 幸也	大人になる前に身につけてほしいこと
	悠久の自然	短歌	新湊高等学校	1年	柳原 圭吾	万葉集
佳作	蔵浄閣	短歌	南砺福野高等学校	1年	中町 美涼	とやまの博物館・文化施設を詠む

### ○美術部門

賞	題名	学校	学年	名前	題材
知事賞	万葉想	高岡支援学校	3年	磯部 遥	万葉集
金賞	壺川	富山市立堀川中学校	3年	大畑 花鳴	壺川
銀賞	富山を愛しています	富山中部高等学校	1年	幾島 杏葉	ビジュアルワイド新日本風土記十六 富山県 富山100年のあゆみ
	深緑の光	南砺福野高等学校	1年	齋藤 夢加	山に入って草を刈ろうー草刈り十字軍17年の軌跡ー
	いつもの景色	富山中部高等学校	1年	西田 さくら	おおかみこどもの雨と雪
銅賞	記憶の中に	富山北部高等学校	1年	石坂 桃佳	RAILWAYS愛を伝えられない大人たちへ
	立山	小杉高等学校	2年	木下 奈鶴美	おおかみこどもの雨と雪
	立山開山縁起	志賀野高等学校	3年	高野 花怜	立山曼荼羅 絵解きと信仰の世界
	私の立山マンダラ	高岡支援学校	3年	堀川 千香子	立山縁起絵巻 有頼と十の物語
夏の夜	小杉高等学校	1年	宮崎 由衣	壺川	

### ○写真部門

賞	題名	学校	学年	名前	題材
知事賞	恋の目覚め	南砺福野高等学校	2年	石野 裕也	壺川
金賞	月夜桜	富山東高等学校	2年	上田 真	越中万葉百科
銀賞	宵の光と影	南砺福野高等学校	2年	川崎 雅奈	九転十起の男
	終止符	富山東高等学校	2年	田川 千沙子	おおかみこどもの雨と雪
	願いを込めて	南砺福野高等学校	2年	矢坂 怜奈	富山の昔話
銅賞	風を感じて…	富山東高等学校	2年	嶋田 愛子	風のまにまに
	御来光に臨む語部たち	富山高等専門学校 (本郷キャンパス)	3年	田島 慶太	万葉集巻17 4003番 「敬みて立山の賦に和する一首 并せて二絶」
	眠りゆく河	富山高等学校	2年	中村 朝子	壺川
	宇奈月温泉駅	高岡第一高等学校	2年	能又 光二	高熱隧道
	光のアトリエ	富山東高等学校	2年	堀川 みなみ	陽が昇るとき
佳作	おじいちゃんとの木	泊高等学校	3年	谷川 偉大	春を背負って

## 表彰式

日時：平成26年10月2日(木) 場所：高志の国文学館



受賞者の皆さん

## 平成26年度「高志の国文学」情景作品コンクール入選作品展示



第19回富山県中学校文化祭

平成26年10月12日(日) 新川文化ホール



富山県立図書館

平成26年10月21日(火)～11月16日(日)



# 高志の国文学館

KOSHINOKUNI Museum of Literature



高志の国文学館では、万葉歌人・大伴家持から、近・現代までの小説、詩、短歌、俳句などのほか、映画、漫画、アニメなど富山県ゆかりの文学の魅力を幅広く紹介しています。

高志の国  
文学館  
KOSHINOKUNI  
Museum of Literature

所在地

〒930-0095 富山市舟橋南町2-22  
TEL 076-431-5492 FAX 076-431-5490

高志の国文学館を訪問して、  
きみも作品を  
創作・応募しよう!

開館時間 | 午前9時30分から午後5時まで  
(展示部門 | 入館は午後4時30分まで)  
休館日 | 火曜日(祝日を除く)、祝日の翌日、年末年始  
観覧料 | 常設展示観覧料  
一般200円、大学生160円【高校生以下無料】



詳しくはHP

高志の国文学館

検索



高志の国文学館

平成26年11月26日(水)～12月27日(土)

